

武蔵野日曜集会 降誕節

霊言の受肉

――ヨハネ第1章1～14節――

1990年12月23日

小池辰雄

50回目の降誕節 本当にキリストに燃えているか キリストを生きる 『エン・クリスト』は私の手紙だと思って 実存主 神の表現体 死なない生命 真の光 絶対恩寵の中に 神然素晴らしい融合の世界 「受肉」(『聖書は大ドラマである』9月3日の項) 幕屋の旅の姿 神の子の誕生

【ヨハネ1:1～11】

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。²この言は太初に神とともにあり、³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。⁴之に生命あり、この生命は人の光なりき。⁵光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。⁶神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。⁷この人は証のために来り、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。⁸彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

⁹もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。¹⁰彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。¹¹かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。¹²されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。¹³斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。

●50回目の降誕節

今日は50回目の降誕節です。私としても感無量であります。まあ、この50年一緒にやったのは家内だけです。今日は、私は門に国旗を掲げたでしよ。あれは三つの意味がある。一つは、日本国民としては今の天皇の誕生日。それから、私的なことですが、我々の結婚の日がまた天皇の誕生日と同じ日なんです。デンマークあたりは、その家の誕生日やそういう記念すべき日には国旗を掲げるんです。私は行つて、そのことを見ましたけれども。



日本人はあまり国旗を掲げないんですが。もう一つは、言うまでもなく、キリストは義の太陽です。このクリスマスと国旗が関係があるなんて、みんなおかしいと思うけれども、これはまさに霊界の太陽という意味です。その三つの意味で今日は特に掲げたわけです。今日は、朝は火のごとき集会になるとありますが、どうぞ、午後の感話懇親会は賑やかに楽しくやってください。夕の祈祷会は、私は特に「伝道50年」と題しましたので、そういう意味から感想を語らせていただきます。昔は「人生50年」と言っただが、私もとにかくキリストに導かれて――「伝道」なんて言っただけで、大した伝道ではありませんけれども――とにかく、やって来たわけです。

●本当にキリストに燃えているか

普段いらつしやなくても、このクリスマスにはやってらつしやる方がある。そういうのをクリスマス・クリスチャンという。これはまあ半分冗談ですけども。ドイツで私はルター教会に行っていました。普段はあまり来ない。ところが、クリスマスになると三倍も四倍もやってくる。まあそれで私は牧師にそう言っただけで、今でもおそらくそうだと思いますが、特に青年男子が一番少ない。それから青年女子、中年以上の男の方。中年以上の女の方が一番多い。それが大体の現象ですね。日本でもあるいはそうかもしれない。

ところが、手島さんの原始福音の連中、彼らは本当によく集まります。そして集会も、普段の集会でも30分以上前に来ている。そういう彼らの在り方、そして非常に仲良くやっている。あれはちよつと他にはない例ではないかと思えます。それはやはり手島さんに燃えていた聖霊の愛が伝わっている。手島さんという人はいろんな面がありますけれども、その聖霊で燃えていた。そして本当に燃やしつくしたですね、あの人は。

人間はそれぞれ長所、短所があります。けれども、一番大事なことは、本当にキリストに燃えているか。この一事です。その点で、特にこのクリスマスを今日迎えて、皆さんが本当に燃えていただきたい。なにも現象を言うのではない。そういう意味でもって、この召団の特色というものはつきりと持っていたきたいわけです。

今度の『エン・クリスト』誌(第46号1991年4月春季号)の標題に、今までは「キリストの福音誌」と書きましたけれども、今度は「聖書伝道誌」ということにした。ということは、召団の方々が本当に一対一の伝道をしていただきたい。本当に聖霊に燃えれば、これはせざるを得ない。「しなさい」なんて私はなにも言う必要はない。そういう意味で、特に「聖霊伝道誌」とした。福音の世界でキリストを遠慮したらダメですよ。ことに世の中は20世紀の終りにきて、非常にいろんな意味で危機的なものを持っていますから。

●キリストを生きる

この10年間、私はもう表向きの伝道はしません。けれども、一つの使命があるから、詩



作に没頭します。特に皆さんがバトンタッチしていただいて、それぞれその方らしい伝道をしていただきたい。それは結局、問題は自分が燃えるということの、その一事なんです。人がどうだこうだと、そんなことはどうでもいい。そういう点で、是非とも変貌していただきたい。いや、変貌なさいます、必ず。これはもう、キリストの生命が来てないと、魂の世界は誤魔化しがきかないですから。いくら外側に励んでみたってダメなんです。そういう意味で、どうぞ、何をしていても、それが本質的な意味においては伝道であるということです。人にたとえ語らなくても、存在そのものが伝道になっているようなこと。

私の兄貴の終りの5年間、私は中学校の5年間は兄貴と一緒に借家の二階に住んでいた。それは本当に今でも目に映ります。右隣が兄貴の机で、右の端に聖書が置いてあって、毎晩読んでいました。半年でもって旧約から新約まで全部読む。ちゃんと開いてあるんです。それを繰り返していた。それから、毎晩祈っていました。私に「聖書を読め」とは言わないんだけど、あの在り方がやがて私に火がついた。そういうことで、なんと言っても、私の信仰の第一恩人は小池政美なんです。

そういうことで、皆さん、キリストを生きるということは、どのような素晴らしいことだということをもつて証していただきたい。学校であろうと、会社であろうと、どこであろうと、遠慮は要らんですよ。はつきりと自分を表していただく。私は陸軍幼年学校の教師をしているときも、小池はクリスチャンであるということとはもう校長もみんな知っていました。だから、あの有名な阿南さんは――戦争の終りに責任を感じて自殺した人です――あの人は私にキリスト教のことを聞きました。学校のドイツ語でも盛んに教材を通して、また脱線して話した。ざるを得ないんです、正直。どうぞ、そういうことで、勇敢にやってください。

●『エン・クリスト』は私の手紙だと思って

それでは、ヨハネ伝1章。もうこれは前にも書きましたが、特に第36号（1988年10月秋季号「ヨハネ福音書の焦点」）には――夏の特別集会の最後の大事な集会でヨハネ伝を話した――この『エン・クリスト』は正直、無駄がないんですよ。皆さん、よく咀嚼してくださいね、私の手紙だと思って。私は無駄な文章を書く気はしない。頭でひねり出すような文章は書いてませんから。文章がうまいとかまづいとか、そんなことはあなた方はひとつも心配は要らないですよ。御霊に乗ったついたら、遠慮なしに書いたらいい。どうぞ、『エン・クリスト』にも証言を書いてください。私はあまりもう今度は書けなくなると思いますから。正直、皆さんと長いことこうやって――まだこれからもちろん集会は続けますけれども――私は皆さんの主にある友情には本当に心から感謝しています。

私は壇上に立つと、おっかないそうだけでも、それは仕方がない。根は優しい人です。キリストの生命がくると、おっかないように見えるので、なにもおっかないはない。



ヨハネ福音書は、特に今日読むところは大変なところですよ。これはひとつの霊的な詩ですね、散文じゃない。

日本聖書教会からまた便りが来たから、私はさつそく書いてやった。

「今までに何回、この文語体の聖書を、詩のところは詩の形にしてくれとお頼みしたのに、さっぱりしてくれない。ぜひとも願います」

と、私はまた書いてやった。それは文語体はあまり売れないから、経済的な計算からやらないんでしょうけれども、ダメだよ、そんなことでは。口語体の方はそうなっているから。

●実存主

「^{はじめ}太初に言あり、言は神と偕^{とも}にあり、言は神なりき。

もちろん、「言」といっても、これは「ロゴス」という字を――フィローの宗教哲学者の言葉を――ヨハネが援用したんですが。あのフィローが言っている「ロゴス」は、ヨハネが言っている「ロゴス」とは内容的には違う。

「初めにロゴスがあった」

と。霊的な実在者。ヨハネにおいては天界の霊的な実在者。「キリスト」という言葉は、ご承知のとおり、「油そそがれたる者」だから、これは地上において神の霊を受けたときに初めて「キリスト」という言い方になるので、天界では「キリスト」ではない。これはもう何とも言えないですね。霊的実在者、実存^{じつぞん}主^{しゅ}です。

「霊言があった」

と。あるいは、

「言霊があった」

と。元の聖書には、「道」と訳してある。「道」と書いて「ことば」と読んだ。しかし、「道」というのは素晴らしいですね。

「我は道なり」

とキリストが言われたんだから。「我は教えなり」とは仰らない。「教」の字はあまり感心した字ではない。「キリスト教」なんてのはね。私はいつも

「キリスト道」

と言っている。キリストは神からの道であり、神への道である。これは「路」ではない。キリストは「道」です。我々は「路」です。我々は各人の足でもって歩く路。この路が道に即したときに初めて本当の路である。天地の公道、天道だからね。キリストは正に天道だ。だから、何とでもいいですよ、「言」でも「道」でも「言霊」でも。とにかく、そういう霊的な実在者が、アブラハムよりも先にあった人だから。



●神の表現体

言は神と偕にあり、

「神と共にあつた」

と。「共に」というのは「並んで」ではない。「あい対して」ということです。面と向つてあるということ。神さまといつも対話のできる体勢にある。もちろん、歩くときには並ぶこともあるし、先に行くこともあるし、後から行くこともあるし、まあいろいろでしょう。

言は神なりき。

「その實在たる言は神であつた」

と。神性、神の性質を持ったもの。この場合の言い方はそういう内容です。この「テオス」という字は定冠詞が付いてない。

²この言は太初に神とともにあり、³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之これによらで成りたるはなし。

全部、神の創造。その具体的な働きはこのロゴスがやったというわけです。自然科学的な判断からはこんなことはわからんです。これはもちろん正に啓示の言葉ですから。

「天地正大の気がすべてをつくつている」

というような藤田東湖の有名な詩がある。正に天地正大の気だから。気であり、霊であり、言である。具体的な表現、表現体、それが言です。神の表現体なんだ。神はもうこれは端倪すべからざるものです、我々の側からは。どう搜したつて出てこないです、神さまは。その霊的な不可知の端倪すべからざる存在に、キリストは

「父」

と言われたんです。みんなこれは躓くですよ、「父」なんて言うと。

「では、母はどうしたんだ」

なんて。そういう意味で言っているんじゃないですよ、あの「父」という言葉は。

魂とは「魂たましひ之これの霊」と書く。「之」は強めの言葉。だから、仮名で書くときにも、「たましひ」と書く。「たましい」と書いたらダメだ。これは靈魂なんだから。

●死なない生命

⁴之に生命あり、

「生命」は「ゾーエー」という生命。これは死なない生命です。永遠の生命。「永遠の」ということは、「変わらない」ということです。質が変わらないんです、いつまでも。ただ時間的に永いのではないですよ、「永遠」というのは。不滅なんです。滅びない。滅びない生命、不滅の生命。これが永遠という言葉です。

「永遠というのはどんな長さですか」

なんて、そうじゃない。



「始めもなく終りもなし」

なんていう言葉もあるけれども。聖書の中にもある。「メルキゼデク」という祭司。キリストがそのような人だと。ヘブル書にも出ている。

この生命は人の光なりき。

生命は燃えている生命だから、光なんだ。「人の光なり」という。「光」という字は太陽から来ている。

「これは太陽なり」

と言つても同じことだ。

今度の『エン・クリスト』45号(1991年1月冬季号)の「独和対照」のソネット(「来るべき十年」)に書いたでしよ。地球は太陽に絶対に依存している。我々も神さまに絶対に依存している。信ずると信じないとに関わらず。信じないで勝手なことを言っているわけだ、この人間というものは。まあしょうがないよ、この福音にでつくわすまでは。

今度の45号は、原始福音の代表者全部に送りました。それから、これは年賀状の代わりに使う。伝道の意味なんです。何と思われても、私はキリストをはっきり告白するからもう、棄てられることは覚悟だ。ところが、これが「隅の首石」となる。

「家造りの棄てたる石は隅の首石となれり」

という。烈々たるものが私の中に燃えていますから。これは誰が何と言おうと。

全く生命は燃えている光だから。「生命」という字と「光」という字は、同じ内容の別な表現にすぎない。

「生命と光の関係はどうだ」

なんて、そんなことは頭で考える必要はない。燃えているものは光らざるを得ない。太陽がそうだもの。同じ光だ。蛍光灯があるけれども、問題にならないです、本当の太陽の光とは。蛍光灯だって、元をただせばみんな太陽の光のおかげで光っているだけのほなしだ。

●真の光

⁵ 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

あるいは、

「光は世に照る」

と言つてもいい。ヨハネ伝でこの「世」という言い方は、暗きところ、罪の世のことです。神さまがその世を愛したという。

「それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡び

ずして永遠の生命を得んためなり。」(ヨハネ3・16)

「独り子をたもうほどに世を愛した」という。

⁶ 神より遣された人いであり、その名をヨハネという。



これは洗礼のヨハネのこと。書いているのは使徒ヨハネだけれど。洗礼のヨハネ、キリストの先駆者。パウロの先駆者がステパノ。先駆者という存在も大変な存在ですよ、これは。

「ステパノなければパウロがない」

と、まあそこまでは言い切れませんが、それくらい大事な役割をしてた。

7 この人は証のために来り、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。8 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

「光に就きて証をなし」という。我々は、キリストにつきて、証したらダメですよ、「につきて」に関して」では。キリストそのものを存在をもつて証しなければ。「について」語ったってダメなんです。もし語るなら、「その中から」ものを言わないと。

9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。

「もろもろの人をてらす真の光」ときたね。太陽の光も真の光なんだけれども。キリストという光はまた次元の違った、質の違った光だから。これを真の光という。とにかく、聖書の言葉は凄い。全部、上からの啓示の力でもつてものを言っているからね。特に新約聖書は。新約聖書というのは本当に無駄がないよ、大変なものだよ、これ。まあパウロが少しやつこしいことを言っているけれども。ギリシアの哲学の知識があるものだから。

絶対恩寵の中に、

10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれ

は己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受けし者、

即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。

「されど之を受けし者」と書いてあるね。ここところは大事なんです、この「受ける」という言葉が。「己の民は之を受けざりき」でしょ。「信ずる」という言葉よりも、「受ける」という言葉の方が大事なんだ。

だから、私はよく、「体受」という。からだで受けとる。全存在で受けとることを「体受」という。一流の坊さんたちは――最澄、空海みんな――あれは本当に如来の世界を体受している。だから凄いんです。ああいう坊さんたちの生涯だとか、書いたものを読むとビリビリ来るよ。私は無条件に尊敬します。

受けること。キリストをからだで受けとらなくてはいけない。からだで受けるから、

「エン・クリスト」「キリストの中に」

ということになる。

この雑誌に大きく「エン・クリスト」と書いてあるのを、ただ眺めていてもダメだよ。「エン・クリスト」という文字が火のように自分に移ってこないとね。まあ、魂が本当に醒めているか、いい加減か、眠っているか、それは自分自身が結局どうにもならん。

「されど之を受けし者」

という。もうこの文章を読んでいて、ビリビリくる。



「己の民は之を受けざりき」

と。今でも受けないわ、ユダヤ人はキリストを。ユダヤ人の聖書は旧約聖書だけ。学者は新約も勉強する人はありますけれども。

しかし、旧約にもなかなか素晴らしい世界がある。特にイザヤ書なんていつたら、もう新約と同じような世界だから。イザヤ書を本当に読んで、新約を否定するなんて考えられないですよ、本当は。

12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。¹³ 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生まれしなり。

「これを信受した者には、神の子となる権をあたえ給えり」

と。我々はみんな神の子。キリストを受けとれば神の子です。

「まだそんなに神の子なんていわれるほど立派ではありません」

なんて、「立派」ではないんだよ。人間的な立派さなんていうことを言っているのではない。絶対恩寵の中に入れば、誰でもが「神の子」なんです。牢屋にいる人でも誰でも。

本当は、監獄あたりに行つて私は伝道したいね。いわゆるお説教ではないから。私のは告白するから。「あなた方と私は同じことだ」と。

● 神然

それで、一番素晴らしいのはこの14節。受肉。言霊の、霊言の受肉。

14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に

父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。

「肉体となりて」とは、「我々と同じ存在となつて」ということ。「肉」という言葉はいろいろな意味がありますけれども。自己中心のわがままな存在。そういった「肉」がたくさいるわ、今は。自由でも何でもない。パウロが言っている罪びとの在り方が「肉」です。キリストに付いての在り方が、どんなにそれが小さなことであっても、「霊」です。霊と肉の違いはそういうことなんです。生れつきの我々は全部、肉なんです。そういう意味の肉と、それから、この場合の肉は、具体的な霊的なものが具体的な我々と同じ表れ方をしたその肉で、「肉となつた」という。我々と同じように、飲んだり食ったり、悲しんだり笑ったり、罪に誘惑されたり。だけれども、キリストはそれに勝った、一切。我々と同じこの肉的存在であつたけれども、勝った。

ということは、賜りたる体そのものが本当に神のものとして動いていたわけです。だから、キリストを通して発する言葉もその行為も全部、神性、神の性質を持っている。そういうのを私は、キリストだけに使っている言葉がある。そういう在り方を「神然」たる在り方という。我々は神然、ということとは言えない。霊然、ということと言えるけれども。神然とい



う言葉はキリストにしか使えない。この神然たる在り方だから、我々の贖い人で、罪の贖いをした。我執、エゴイストを贖った。人間はみんなエゴイストだから。エゴイストの親玉はサタンだから。まあ地上のすべての問題は、個人であろうと社会であろうと国家の問題であろうと、全部このエゴイズムの問題です。それでガタガタガタやっているわけだ。

●素晴らしい融合の世界

だから、戦いというのは、本当は自己との戦いなんです。それが一切との戦いの一番の原動の戦いなんだ。自己との戦いで勝っている人はいかなる戦いにも勝てる。

「自己との戦いは最も困難な戦いである」

と。これはカントの言葉です。

「自己に勝つことは最大の勝利である」

これもカントの言葉です。

ところが、この戦いが今度は、キリストの光が入って生命が来ると、いわゆる戦いではなくてくる。素晴らしい融合の世界に入ってくる。

原子爆発でなくて、原子融合みたいな、融合の世界に入る。その境地をとにかくある程度、持っていたのがゲーテなんです。「神―大自然―我」というのが融合の世界にある。「エーベンビルト・ゴッテス」（神と同じ姿）という言葉が好きだったんだ、ゲーテは。「神とまさに同じ姿」という。あの「似姿」という訳はあまり好きではないんだ、僕は。似ているのではない。同質にされている。

「本来、神の姿につくられた」

と、この45号に書いてあるとおりです。それがエゴイズムになったから樂園喪失になってしまった。あれはみんな神話でありながら、全部、我々の現実を語っている。だから、凄いです、この聖書の神話は。

「これは神話じゃないか」

なんて言って片づけているが、ところが片づかないんです。いわゆる摩訶不思議を言っているんじゃない。我々の現実をズバリと語っているんだ、あの神話は。だから、聖書とというのは凄い本だね。神話に躓いている。

●「受肉」（『聖書は大ドラマである』9月3日の項）

我々の間に幕屋を張った。「幕屋した」と私は訳しました。私の第十卷（『聖書は大ドラマである』）に書いてある。「9月3日」の「受肉」のところですよ。

私は、聖書の36カ所どころではなく、もう50カ所くらい、あるいはそれ以上、拾ってあるんです。ただそれを一頁の中に織り込んであるものだからね。

これはヨハネ伝の1章1、3、14、17節がこの「9月3日」のところに選んで乗っけてある。



「^{はじめ}元始に^{ことだま}言霊があった、言霊は神と共に在った。言霊は神であった。³万物はこれによって成った。⁴この中には生命があった。そしてその生命は人々の光であった。¹⁴言霊は肉となって我らの中で幕屋した。我らは彼の栄光を見た。父からの^{ひとりご}独子の栄光で^{めぐみ}恩恵と^{まこと}真法とに満ちていた。

「まこと」はこの場合、「真法」と書いた。「真理」というと、何か観念的な響きなんだ。この真理という言葉は僕はあまり好きでない。法です。「水は低きに流れ去る」、そういう自然法みたいなもの。^{まこと}真の法です。

¹⁷律法はモーセによって与えられ、恩恵と真法とはイエス・キリストによって到来した。¹⁸未だ神を見た者はない。ただ父のふところの中に没入した^{あらわ}独子の^{まこと}みがこれを顕した。」

これが17節、18節の訳です。半頁ほどの註解が出ている。

「神は永遠の実在である。元始とは創造の元始で、言、^{ことだま}即ち言霊が創造以前からあった。それは神性であった。神と共に実在した神格であった。

「神格」だね、正に。人格でなくて、神格。

この言霊には生命があり、且つ光源であった。万物はこの神格によって創造された。人間もそうである。しかもこの言霊(ロゴス)が受肉して我ら人間界の中で幕屋を張った。即ち我々と同次元の肉なる存在となった。しかもそれは光と生命で輝いていた。神を父と呼ぶ独子であって、神の恩恵と真法に満ちていた。律法(十言、十戒)はモーセによって与えられ、恩恵と真法の現実即ち愛と義の現実は受肉のキリスト・イエスによって到来した。イエスは父の懷に没入した正に父と一如の実存である。その言霊なる実存に生命があった。その生命の実質は愛である。愛は熱いから光なのである。言霊は生にして愛にして光なのである。この言霊によって創造された人間には同質の霊が宿る。だから^{ひと}霊止なのである。創世記1・27と照応する。」

●幕屋の旅の姿

だから、生命も愛も光もみんな、これは「^{エル}L」で始まっている。この三つの「^{エル}L」は同じことなんだ。「ライフ」「ラブ」「ライト」。三^{エル}L。これにもう一つドイツ語を入れれば、「^{エル}霊、風」の「^{エル}ルフト」。ヘブライ語やギリシア語は、^{エル}霊、風、気もみんな同じ字です。だから、四^{エル}Lになる。十字架みたいに。あの「ハーゲン・クロイツ」も元々は「^{エル}光」からきている。

特にこの「幕屋した」という言い方がおもしろい。パウロは、我々の肉体そのものを「幕屋」という言い方をしている。それからもちろん、旧約時代は、テントを張って旅をしていた。住まいであるのと同時に、神さまとの「出会いの幕屋」というのも造った。要するに旅のすがた。神の歴史は旅ですから。時間的には歴史だけでも、空間的には旅なんです。とにかく、非常に動的な在り方です。進んでやまない。寺院だの教会だの、おさまってしま



うとダメなんだよ。だから、幕屋の姿が本当は一番宗教的な姿なんです。神さまと一緒に動いているんだからね。目的に向って進んでいる姿がこの旅の姿。どこかに納まってしまつて、家を造つてしまつて、住み込んでしまつたらダメなんだ、本当はね。まあそれは半分この世的なことですけども。本当の姿はそうだということ。

●神の子の誕生

それで、特別な存在だから、「独子」というんですが、

実に父の独子の栄光にして恩恵と真理めぐみ まことにて満てり。

と。「真理」でもいいですよ。具体的な神さまの御意の表れが、これが「真理」。

「原理」ではないんだよな、「原理研究」みたいな。昔はよく、この「原理」という言葉を使つたけれども――いや、私は使わなかつたけれども――藤井先生なんか時々使つていた。でも、藤井先生も「真理」という言葉は好きだったね。藤井先生という方は決して観念的な人ではない。非常に詩人的な面がありましたから。内村鑑三、藤井武、塚本虎二とにかくあのご連中はそれぞれの役割を本当になさつた方です。

我々はこのキリストを私たちの中に本当に今日は誕生させなくては。エックハルトがその角度から、「神の誕生」というような言い方をしているけれども。神の子の誕生。我々はキリストと共に新たに天的生命をもつて乗り出す。そういう意味でもつて、このキリストを迎えているわけです。そのためには、キリストの中に祈り込まなければダメです。

大体、この14節までの私の聖書の御言に即した告白はそんなわけです。ヨハネはこのようにしてキリストをある程度客観的に――もちろんその中からものを言っているけれども――叙していましたけれども、我々は今この14節までを読んで、その光が――その生命、光、道、真理が――全部自分とのつぴきならない関わりのものである。そういう角度から、一人称・二人称をもつて、もういつぱいあなた方は読み返しなされると、本当に身につくわけです。

「キリストはそういうひとですか」

ではないですよ。そのキリストが我々にその同じ光を、同じ生命、同じ愛、真理を化体かたいさせるためにやつて来たんだと。そうすると、読んでいて、グーッと力がくる。

「そうですか、まあキリストは素晴らしいが、我々はなかなか」

なんて、そうじゃないんだよ。我々にこそそれを与えるためにやつて来たので、読みながら直ちにその世界に遠慮なく入ること。遠慮は要らんですよ、絶対恩寵なんだから。こつちの条件は要らないんだから。「はい、いただきます」と、無条件にいただいている。聖書とこののはそういう読み方をしなければ。

今日をきっかけに――今まではそうでなかったと言うのではないですよ――いよいよもつてそういう読み方、聖書の見方を――「方かた」といったって方法じゃないけれどもね――是非とも、召団の方々は身につけていただきたい。それでは、午前はこれでお終い。

